婚約者を想うのを
やめました

かぐや
Kaguya

Regina
BUNKO

登場人物紹介

Characters



ランドン

アスカリオ帝国の皇太子。幼い頃からの婚約者であるジョージアナを差し置いて、多くの令嬢たちと時間を共に過ごしていたが――？

ジョージアナ

クロローム公爵家の令嬢。皇太子の婚約者として厳しく育てられていた。『愛し愛される夫婦』になることを願っていたが――？

クレア

ジョージアナの学友である令嬢。おとなしい性格で、人のことをよく観察している。

エドワード

ランドンの側近を務めているスペード家の子息。ジョージアナに対し、秘めた恋心を抱いている。

ミランダ

ジョージアナの学友である令嬢。はっきりとした性格で口が達者。

目次

婚約者を想うのをやめました　7
書き下ろし番外編　羽化　337

婚約者を想うのをやめました

第一章　宣言

幼い頃は、あんなにも仲が良かったのに……

そう思ってしまってからである。自分の感情が、置き去りにされてゆくような感覚になったのは。

束の間の安逸を貪ることさえ許されない世界で、愛やら運命やらなにやらを謳うのは滑稽だと嗤う者もいるが、私はそれが永遠であり確固たる約束だと信じて疑わなかった。

（けれど、もう終わりかしら）

だって、彼は私を見つけてはくれない。私はどれだけ距離が離れていても、どれだけ彼が落ちぶれても、みっともなくなっても、見つける自信、愛する自信があったのに。

観念の臍を固める、その時がきたのだと悟った。

◇　◇　◇

アスカリオ帝国は、この世に生きている者ならば誰もが知っているであろう国の一つである。アスカリオ語は万国共通語と指定され、千紫万紅に彩られた帝都立公園は観光場所としても名を馳せているなどアスカリオの並外れた影響力が窺える。

そんな帝国で、我がクロローム家は公爵に叙されていた。帝国では公爵位は三家しか名乗ることが許されておらず、そのことからも畏敬するに値する家柄であるといえる。それだけではなく、皇族に次ぐ権力を有し、歴史ある名家であることから、他の貴族から一目置かれているのも無理からぬことであった。

そのような家で長女として生を受けた私は、皇太子殿下と同い年であるということが災いし厳しく育てられた。家柄や権力等の釣り合いが取れるという理由で、皇太子殿下の婚約者として白羽の矢が立ってからは、一層熱の入る教育に一種の諦めさえ抱いていた。

毎日、侍女たちによって手入れが行き届いた金色の髪に、吹き出物一つない白い肌。コルセット知らずの細い腰を維持するため食事管理は徹底されている。

美しく、賢く、お淑やかな第一皇子殿下の婚約者、ジョージアナ公女。私はクロローム家が思い描いた美しい人形として生きていかなければならなかったのである。そん

な贅沢で優雅だが、窮屈で厳しい生活に虚しさを感じていた時である。私よりも濃く美しい金髪と、禍々しいなにかが蠢く妖艶な紅い瞳をお持ちのランドン殿下にお会いしたのは。

出会った時は殿下に特別な感情は抱かなかった。殿下の幼いながらも完成された美貌には確かに驚いたが、それよりも蜜を湛える花に集る蜂の如く彼に群がっている令嬢たちに、かなり引いてしまったことを覚えている。人気のない殿方も大変そうだが、魅力的すぎるというのも考えものだ。

殿下も殿下で大変だと同情を覚えたぐらいであった。

――興味が生まれたのはいつだっただろうか……

「失礼します、殿下」

生徒会役員とその関係者のみが使用を許可されている部屋の重々しい木製の扉を開くと、そこには椅子に座り、なにやら書類を読んでおられる殿下がいらっしゃった。宮中では皇太子として、学園では生徒会長として忙殺されている殿下の顔色は、心なしかあまりよろしくないように見える。

「ジョージアナじゃないか。どうしたんだい、こんな時間に」

優し気な微笑を浮かべ、甘い蜂蜜のような声色で問うてくる殿下。

そんな彼を見て、脳裏に過るのは殿下との眩しく初々しくも、素敵な記憶であった。

隠れん坊という遊びの楽しさを教えてくださったことや、効率の良い勉強の仕方を教えてくださったこと。学園に通うことが少し緊張すると零した私に、僕がいるから大丈夫だと仰って、安心させてくださったこと。

全てが現実で起こったのことなのに、夢の世界で起こった出来事のようだと意識の底で悲しんだ。

殿下は、学園に入学してから徐々に、しかし確実に、私を避けるようになった。そして、まるで初恋に溺れ愛に縛られる私を嘲笑うように、殿下は私ではない令嬢を自身のお隣に置くようになったのである。

（今でも覚えているわ）

あの時の、目の前が暗い闇に染まるような絶望。魂が引き裂かれるような痛みに、呼吸の仕方さえ奪うような混乱。

全幅の信頼を置いていた相手に裏切られるという感覚は、想像を絶するものであった。

（それでも、嫌いになんてなれなくて）

私はこうして二年という月日が経った今でも、殿下の心を惨めにも、愚かにも、渇望しているのである。

（私の望みは、たった一つだけなのに）

――選ばれた令嬢と選ばれなかった私、一体なにが違うのか……

雁字搦めになった感情が私の心を再び縛ろうと、蛇のように絡みつく。その鎖から逃れるように、私は固く拳を握り、ふうっと息を吐いた。

（でも、これ以上、縋りついては駄目よ）

道を踏み外す前に、殿下に取り返しがつかないほど嫌われる前に……。自身の感情と決別しなくてはならない。その時が、きてしまったのだから。

「私は殿下のことをお慕い申し上げておりました」

突然の告白に、殿下は目を丸くして私を見つめる。私はそんな殿下を様々な感情を込めて見つめながら、努めて厳かな声で続けた。

「たとえ、殿下が皇太子ではなくただの男性になっても、その麗しいお顔が爛れても、足がなくなっても、変わらず愛を捧げられると自負しておりました」

「……ジョージアナ、あのことをまだ怒っているのかい？　それについては謝るよ」

「いいえ、違いますわ」

間髪容れずに否定した。あのこととはおそらく、昨日、身分の低い令嬢と共にいたことだろう。



心の生傷がずきりと疼く。痛いと、辛いと、酷いと悲痛な声を上げる。私はそんな感情を敢えて見て見ぬ振りをした。ここで苦言を呈せば、縋れば、また同じことを繰り返すことになると分かっているからだ

もう殿下を捨てると決めた。

もう気にかけないと、己の恋心から殿下を解放して差し上げると、覚悟を決めたのだ。

私は凛とした声音で一言一言噛みしめるように、申し上げた。

「殿下のことを愛していました、ですがそれをやめます。今まで、殿下の女性関係について口出しをして申し訳ございませんでした」

「……もしかして、別の方法で僕の気を引こうとしているの？」

胡乱（うろん）げな感じに聞かれ、私は再び「いいえ」と否定した。

「今、この時より殿下への一切の干渉をやめると宣言させていただいているのです」

「そうなんだ。……でも、その宣言、わざわざする必要はあるかい？」

冷淡で突き放すような言い方である。実際、突き放すつもりで仰っているのだろう。

年月を経ると共に人は変わる。移ろいゆく心を止めることはできない。

（どうしてそのことに早く気づかなかったのか）

愚か者は一体誰なのか、分からなくなる。

「これは私自身への宣言でもありましたので。貴重なお時間を奪ってしまい、申し訳ございませんでした。二日三日はまだ心の整理ができないかもしれませんので、伝達事項等は公爵家を通していただきますようお願いします。では、失礼します」

殿下がなにか仰ってくださるのではないか、という淡い期待はもうなかった。裏切られることがおそろしいからではなく、期待するだけ無駄であると悟っていたからである。

私は殿下に深くお辞儀をすると、未練や恋情といったままならぬ感情を全て断ち切る思いで、お部屋から静かに退室した。

その日の空は、薄暗くどんよりと曇っており、快晴ではないあたりが実に私らしいと、自嘲（じちょう）の笑みをひっそりと零した。

◇　◇　◇

殿下に「もう愛するのをやめます」と宣言してからも、やはり私の心持ちは良好とは言えなかった。

殿下の女性関係は相変わらず華麗なままで、私の胸には嫉妬と絶望という汚い感情ばかりが残されてゆく。

厳格な父に婚約の解消を願っても、家名を重んじる母に泣き縋っても、どうにもならない。

（やはり、正解だったのよ……）

見知らぬ令嬢たちと一緒にいらっしゃる殿下を見かけて、私は無慈悲で残酷な現実から目を背けるように、私の心を奪うだけ奪って苦しめる殿下から逃げるように、その光景から目を逸らした。

いつもならば、心の中で芽生えた感情のまま殿下を問い詰めて苦言を呈したあと、屋敷に戻って悲劇の主人公の如く泣いていたことだろう。

だが、もうそのようなことはできない。

干渉しないと、愛するのをやめたと申し上げたのだ。賽は投げられた、後戻りはできない。

――温かく甘く、私を苛んできた恋情とお別れするとは、こういうことなのである。

私は友人のクレア様とミランダ様の元へと向かいながら、やはりあの宣言はお互いのためにも必要だったのだと改めて実感した。

◇　◇　◇

あれから七日という、長くも短い月日が流れたある日のことである。昼休みに、友達と三人で学園の中庭にある露台で昼餉をとっていると、露台から少し離れた場所を殿下と下級貴族令嬢が並んで歩いていくのが見えた。

私は気にせず食事を進めたが、事情を知らぬ二人は違ったようだ。

「まあ、またですわ」

「なんてはしたないのかしら」

「ジョージアナ様、少々お待ちになっていて。わたくし、文句を言いに行ってきますわ」

そう言ってぶんぶんと片腕を回し、殴る準備をしているミランダ様を私は「必要ないわ」と止めた。

そんな私を不思議そうに、どこか訝しむように見てくる二人の友人。無理もない、いつもの私なら苦笑を浮かべつつも止めようとはしなかっただろう。いつかは、私を見てくれるのではないか……という愚かな期待を抱いていたからである。

だが、今後一切干渉しないと約束したのだ。殿下への恋情を断ち切ると宣言したので、物理的にも距離を置かなければ。

これがなにを意味するのか張本人である私が一番理解している。

「殿下は帝国の宝。宝を独り占めしようなんて傲慢だったのよ」

「！　そんなっ、ジョージアナ様は殿下の婚約者ではありませんか。当然の権利ですわ」

もう一人の友人クレア様が驚いたように反論するが、私は静かに首を振った。

「いいえ、その権利は行使できないただの紙切れだって漸く分かったの。私は所詮ただの婚約者、皇太子にとって都合の良い駒にすぎない」

私は殿下の特別にはなれなかったと、静かに言葉を落とした。声から滲み出る感情は悔しさでも嘆きでも憤りでもなく、諦観であった。

「ジョージアナ様……」

勘の鋭い彼女たちのことである、殿下が私を愛することはないと気づいていたのだろう。ただ、無慈悲な現実から目を背け闇雲に愛を乞うていた私には言えなかっただけで。

「殿下は分からず屋ですね」

俯く私に、憤懣やるかたないという表情でミランダ様が言った。

「他人に愛されるということがどれだけ尊いものか、ご存知ないのですわ。それが無限ではない、ということも」

「全くです」

クレア様はぷくうと頬を膨らませ、ミランダ様の言葉に同意したあと、ついでにとばかり「いつか殿下は痛い目にあわれますよ」と至極真面目な口調で不吉な予言をした。

「痛い目？　地獄の炎で炙られるとかかしら」

「殿下にとっては同じようなものでしょう」

なにやら真剣に皇太子の不吉な未来について語り合う二人を見て、不謹慎なことにも私はふふっと声に出して笑った。決して穏やかとは言い難い話題であったが、そんな二人が愛おしくて仕方なかったのである。

幼い頃から、殿下は私にとって太陽のような存在であった。太陽を中心にして、私の世界は回っていた。

（でも、今は違う）

私のために憤り、私のために真剣に物事を考え、私の覚悟や決意を汲み取ってくれる彼女たちに心がじんわりと温もりを帯びた。殿下によって容赦なく抉られた傷口が、癒えていくような感覚さえ覚える。

己にとってなにが大切なのか、なにが必要なものなのか。今度こそ冷静な判断力をもって吟味しなくてはならない。

そんなことを考えているとミランダ様が「そうだわ！」と弾んだ声で言った。
「いつまでもこのようなお話をするのはやめましょう。ジョージアナ様のなさったことは英断ですし、殿下には天誅が下ることでしょう。はい、以上です」
そう言い切ったあと、ミランダ様は私たちの手をぎゅっと握った。
「実はわたくし、前々からやってみたかったことがあるんです。ジョージアナ様、クレア様、気分転換も兼ねてよろしければお供願えませんか？」
そう言ってにやりと微笑んだミランダ様の笑顔は、悪戯っ子特有の笑みであった。

◆◆◆

ジョージアナの「もう愛するのをやめます」という宣言以降、僕は彼女がなにを覚悟してそのようなことを言ったのかなんて考えることもなく、自由を楽しんでいた。
下級令嬢たちと一緒にいても、苦言を呈されることも、涙声で縋られることもない。ジョージアナたちになにかを言われたと訴えてくる令嬢もいなくなり、解放感さえ覚える。数年ぶりに大空を自由に羽ばたける鳥のような、そんな感覚に近かった。
しかし、それが三日も続く頃には奇妙ななにかを感じていた。歯と歯の隙間になにかが挟まっているようなはっきりとしたものではなく、なにかを失ったような、なにかを忘れているような……なんとも形容し難いものであった。
五日目になる頃には、漸くそれが違和感だと気づいた。
僕の隣に当たり前のようにいたジョージアナがいない。お茶を一緒にしないかと誘いにも来ない上、皇太子宮にも姿を見せることはない。
降り積もる違和感に恐怖と一抹の不安が加わったが、忙しいのだろう、気分ではなかったのだろうと結論づけることで、僕は気づかない振りを貫き通した。
――この時、きちんとジョージアナと向き合っていたら、救いようのない愚かな過ちにすぐに気づけたことだろうに……

◇◇◇

（さっき、僕に気づいていたはずだ）
露台で友達と昼餉を楽しんでいたジョージアナを思い出しながら、苛立ちとも不安ともいえる感情を誤魔化すように下唇を噛んだ。
目が合った時、ジョージアナになにかを言われるのではないかとおそれた。しかしそ

れと同じぐらい、なにかを言ってくれるのではないかと期待もしていた。

――なのに、彼女は文句を言いに来るどころかこちらを見て見ぬ振りをした……

令嬢たちが楽し気に笑いお喋りに夢中になっている姿を眺めながら、思考と胸を蝕む得体の知れぬなにかを振り払おうと紅茶を飲んでいると、側にやってきた側近であるエドワードが「少しよろしいですか」と、粛々とした雰囲気を醸し出しながら僕に耳打ちをした。

「ジョージアナ公女が先程、ご友人であるミジュエット侯のご息女とアーガスト伯のご息女と共に早退なさったようです。体調がよろしくないとのこと」

「……早退？」

ジョージアナらしくない行動である。どれだけ体調が思わしくなくても、化粧と根性と矜持でそれを隠し、あとで寝込むことが常だったジョージアナが、少々の体調不良如きで午後の授業を抜けるとは思えない。それに午後の授業は僕のクラスと合同で実験をする科目がある。それを常々楽しみにしていたジョージアナが抜けるなんて……

そこまで考えて、はっとした。そういえばジョージアナは僕のことを愛するのをやめる、と言っていたなと唐突に思い出したのだ。

（いや、あれはただの作戦に決まっている）

なにしろ、僕が浮気紛いのことをしようものなら物凄い剣幕で怒る令嬢なのだ。彼女とて本気ではないはずである。

――本当に……？

「殿下ぁ？　どうなさいましたの？」

背中を剣の切っ先でなぞられているような、なんとも表現できぬ恐怖に暫し放心していると、なにも知らぬ令嬢が甘えた声で猫のように僕の腕にすり寄ってきた。僕はその拘束から逃れてから努めて何事もなかったかのように柔く微笑んだ。

「なんでもないよ。それより、クッキーでも食べるかい」

「殿下が食べさせてください～」

「どうしたの、今日はえらく甘えん坊だね？」

そんな風に令嬢と特に意味のない会話を繰り広げていると、側近がいつの間にかいなくなっていた。

（全く変わった人だ）

あの側近はきっとジョージアナに淡くも確かな恋心を抱いている。僕とジョージアナが話していると、必ずジョージアナに熱い視線を送っているのだから、ただの憶測ではないだろう。

だから、報告しなくてもいいことまで報告してくるのだ。

「あなたの婚約者は私がずっと見ている、あなたはそんなことをしている場合なのか」という、警告と牽制を兼ねて。

昔のようにジョージアナと仲良くしなくてもいいのか、と問われたら答えは「別に良い」だ。

ジョージアナは僕がどう足掻いたところで僕の将来の妃であり、未来の国母である。そこに好きだの嫌いだのという私情を挟むなんて愚の骨頂。

でも、ジョージアナはそうではないようだった。愛という幻影に惑わされていた。

「皇太子という地位に相応しい言動を心がけるようお願いいたします」と言って諭したかと思えば、「私ではいけませんか」と言って僕に縋りつこうとする。

ジョージアナがいやなわけでも、特別嫌いなわけでもない。これは本心だ。むしろ、賢く美しい女性が婚約者で幸せ者だとさえ思っている。

だが、僕にとってそういう対象ではなかった。本当にそれだけなのである。

（例の宣言だって、気にすることもないだろう）

「殿下？　なにを考えていらっしゃるのですかー？」

「……ちょっとぼおっとしていただけだよ」

上目遣いでそんなことを訊いてくる令嬢に、僕は優しく微笑んだ。どこか作り物めいた笑顔である。

父である陛下は「胡散臭いからやめろ」と仰っていたが、この微笑一つで頑固な古狸や癇癪持ちな貴婦人、純粋無垢な令嬢まで意のままに操れるのだ。利用しない手はないだろう。

勿論、例外はいる。

僕は令嬢の視線から逃れるように、喋りかけてきた別の令嬢の会話に耳を傾けながら、今頃、ジョージアナはどうしているのだろうかと考えた。

頑固で我慢強いジョージアナが早退するということは、それだけ体調が思わしくないということである。大したことがなければそれで良いのだが、病というのは気軽に人の命を弄び、最終的には無慈悲にも奪っていくおそろしいものだ。

（放課後、お見舞いに行こう）

そう決めた僕は、愚かなことにも気づいていなかった。

――ジョージアナの「愛するのをやめます」という宣言が、未来永劫続くものであるということに。

◇　◇　◇

授業終了のベルが鳴ると、必ずジョージアナが「このあと、お茶でも如何ですか？」と赤薔薇がぶわっと咲いたような満面の笑みを浮かべて誘ってくれる。

そんな彼女がいないという事実が、何故か胃を締め付けるような気持ちの悪さをもたらし、僕は早々に迎えの馬車に乗った。

「宮廷に戻られますか？」

待機していた側近に聞かれ、僕は迷わず答えた。

「いや、ジョージアナの屋敷に行く」

「え⁉　ジョージアナ公女のお屋敷にですか？」

「そうだけど。なにか問題でも？」

「いいえ。畏まりました」

側近がやや驚いたように了承したので、失礼だなと眉を寄せる。まさか、僕が婚約者の体調不良でさえ気にしない人間だとでも思っているのだろうか。

僕はなにもジョージアナを蛇蝎の如く嫌っているわけではない。ただ、婚約者（政治的パートナー）としてしか見ていないだけで、虐げたいとかいじめたいとかそんな感情を抱いているわけではないのだ。

（僕はそんなにも薄情な婚約者に見えているのだろうか）

とある令嬢と遊んでいるのをジョージアナに知られた時、泣きも怒りもせず淡々と呆れたように僕を見ていた彼女の姿をふと思い出した。

『せめて、お相手を絞ってください。節操のない方だと悪評が立つのは殿下です』

（確かに僕は薄情なのかもしれない）

勝手に、彼女が僕に対する愛や恋なんかに現を抜かしているからそう言っているだけかと、妬みや嫉みの類の感情のせいだと、思い込んでいたが。

「僕を思って言ってくれていた言葉もあったのだろうな」

「？　殿下？」

「見舞いに行くのに手ぶらっておかしいよね。近くの花屋とか、お菓子屋とかで、馬車を止めてくれないか。ジョージアナに見舞いの品を買うから」

相手は皇族さえ無暗に手を出せぬ公爵家の姫君。本来ならば希少かつ高価な花や、平民ではとても手が出せないようなお菓子が見舞いの品としては相応しいのだろう。

だが、なんとなくジョージアナにはどこにでもあるような花が似合うだろうと、そう

思った。決して蔑視んでいるわけではなく、彼女なら喜んでくれるだろうという温かな気持ちからだった。

「いらっしゃいませー、どんなお花をお求めですか？」

僕の服装を見て上客が来たと愛想の良い笑顔を浮かべつつも、しっかり秋波も送ってくる強かな女店員に、皇太子然とした微笑で返しながら問うた。

「女性に贈りたいのだが、良い花はあるか？」

聡明で優雅な女性だと付け足すと、女店員はやや目を丸くしたあと、どこか楽しそうに飾られている花を見渡す。

「んー、でしたらデージーとかはどうでしょう。この通り、華やかな見た目ですし優雅な女性にぴったりですよ」

大輪の赤薔薇姫と呼ばれているジョージアナには少々地味に思えたが、紅く色づいた艶やかな花は確かに彼女に似合うだろう。購入しようと控えていた側近に声をかけようとした時であった。

「あらまあ、奇遇ですね旦那様。どこぞのご令嬢にでも贈るおつもりですの？」

軽蔑が見え隠れするどこか聞き覚えがある声がしたほうを見ると、そこには町娘の恰好をしながらも高貴さが隠しきれていないジョージアナと、その友人たちが様々な感情

を込めてこちらを見ていた。

「！　ジョージアナ……」

「でん……旦那様、ごきげんよう。珍しいですね、旦那様自らお花を購入なさるなんて」

そう言ってふわっと穏やかに微笑んだジョージアナからは、嫉妬も憤怒もなにも感じられなかった。

そこにあるのは淡々とした凪いだ海のような感情で、極めて穏やかなものだった。

◆　◆　◆

まさか、ここで殿下に会うとは思っていなかったので私は驚きを隠せない。

私たちはミランダ様の「早退して、町娘の恰好で街をぶらぶら歩きませんか？」という魅力的かつ背徳感ある誘惑に負け、先程までお菓子を食べたり、雑貨を見たりと、ぶらり気儘に歩いていた。

穏やかで優しいこの時間はとても楽しく、永遠に続けばいいのに、と思っていた矢先の出来事だったので、目の前の状況を上手く脳内で処理できない。

どうして、このような場所に殿下がいらっしゃるのだろうか。
素朴な疑問を抱くが、すぐに彼の手に一輪の花が咲いていることに気づく。
（デージーの花……？）
鮮血が無造作に塗られたようなデージーの色は、殿下の瞳の色とそっくりだ。
（女性に差し上げるための花を選んでいたのね）
と、納得してしまった。
「でん……旦那様、ごきげんよう。珍しいですね、旦那様自らお花を購入なさるなんて」
私もミランダ様と同じように殿下が皇太子であることを伏せて、話しかけた。護衛の騎士が側にいるといえど、ここは皇宮や学園ではなく街である。用心するに越したことはないだろう。
殿下は私の顔を見てわずかにたじろいだように瞳を揺らすが、それがなにを意味するのか分かる前に、彼は優しい皇子様の仮面をつけてしまった。
「ごきげんよう、ジョージアナ。クレアとミランダも本当に奇遇だね」
聡い殿下は私たちの意図に気づき、話を絶妙に合わせてくれる。
ここでお互いの身分を明かすのは得策ではないが、実に変な構図が仕上がったものだ。

「それにしてもおかしなことがあるものだ、僕は君たちは体調がよろしくない、と聞いていたのだが」
「それはもう治りましたので。早退ついでに、とここに参ったのです」
「そうなんだ、それは良かったよ」
しれっと笑顔で嘘をつく強かなミランダ様と、彼女の嘘を嘘と見抜いていらっしゃるだろうに微笑みながらも付き合う殿下。
私とクレア様はそんなお二人を黙って見つめた。
「だけど外で遊ぶのは感心しないな。ミランダの体が丈夫でも、ジョージアナもそうとは限らないだろう？」
「確かに配慮に欠けておりましたが、ジョージアナさ……ジョージアナは旦那様が思うほど弱くありませんことよ？」
「万が一ということもある」
（なんてこと……）
お互い、口角は上がっているのに目が笑っていない。
それがなんとも言い難い禍々しい雰囲気を醸し出しており、私はどうしたら良いか考えあぐねた。女性の店員もデージーの花束を持ったまま成り行きをじっと見守っている。

その目が輝いているように見えるのは、私の気のせいだろうか。
　クレア様に至っては完全に別世界へと意識がいっており、関わりたくないという気持ちが良く伝わってきた。
　そんな時に沈黙を貫いていた殿下の側近、エドワード様がやんわりと間に入ってくれた。
「旦那様、ご本人がいらしているのですから、ご本人が所望されるお花をお買い求めになられては如何でしょうか」
　という、思ってもみない言葉だった。
「……本人？」
　怪訝な顔で問うと、殿下が少しばかり恥ずかしそうに教えてくださった。
「君が体調が悪いと早退したから心配で。お見舞いに行こうと思ったんだよ。そのために花を贈ろうと思って、花屋に立ち寄ったんだ」
「まあ、そうでしたの。それは、お手を煩わせてしまい申し訳ございませんでした」
「いや、深刻な病ではなさそうで良かったよ」
「……お気遣いに感謝いたします」
　私は軽く頭を下げたあと、淑女の笑みを貼り付け「しかし」と言葉を続けた。



「今後一切このようなことは不要です」
「……え」
なにを言われているのか本当に分からない、とばかりに困惑した面持ちで私を食い入るように見つめる殿下。優しい皇太子の仮面も、節操のない殿方の仮面も剥がれ落ちており、殿下本人の素の心情を如実に表していた。
（まさか、断られるはずがないと思っていたのかしら）
断らずにいられたら、どれだけ良かったか。
私が殿下の厚意に素直に「嬉しい、素敵な花ですね」と申し上げることができていたら。そして、微笑む殿下に抱き着き、感謝の意を表せたら……
殿下の瞳の色を移したようなデージーを手に、彼の腕の中で微笑むことができたら。
どれだけ幸せなことか。
だが、賽は投げられた。
その事実を無視することはできないのである。
「……もしかして、デージーがいやだった？　それなら別の花……ペチュニアとかどうだい？　綺麗なジョージアナにはぴったりだよ」
私は美辞麗句を微笑で躱した。

「私よりも、旦那様のお気に入りの女性たちに差し上げたら如何です？　きっと喜びますわ」
「……なに言って……」
呆ける殿下に、私は様々な感情をぐっと堪えて呟く。
「私はもう、いただきませんから」
「……え」
「それでは、旦那様。私たちは用事があります故、屋敷に戻らせていただきますね。お先に失礼いたします」
私はそう言ってお辞儀をすると、ミランダ様とクレア様と一緒に大通りまで歩いた。
沈黙を貫きながら歩くこと数分、やっと殿下の姿が見えなくなったあたりでまともな呼吸をすることができた。
「思わぬ遭遇でしたね……」
ミランダ様が木製の椅子に座りながら疲労を滲ませつつ言う。それに私とクレア様も倣いながら、同意した。
「本当に。神は悪戯好きだから」
「でも、ジョージアナ様とてもかっこよかったですわ。惚れてしまいそうでした」

「あら、嬉しいことを。クレア様が私のところにお嫁に来てくれたら一生可愛がるわ」
可愛らしく顔を赤らめているクレア様の頭をよしよしとすると、彼女は嬉しそうに
「ジョージアナ様に撫でられている！」と呟いていた。愛らしいことである。
「それにしても、ジョージアナ様よくずばっと言えましたね。デージーの花、本当は欲しかったのでは？」
ミランダ様の鋭い言葉に、私はクレア様のふわふわの頭を撫でながら苦笑をもらす。
欲しかった。その花を貰う権利があるならば。それは言を俟たない素直な気持ちだが、その一方で欲しくはない、と思う自分も確かにいた。
（不思議ね）
恋は摩訶不思議である。終着点なんてないように見える感情だが、ある道に迷い込んでしまえばあっと言う間にそこまで辿り着けてしまう。
「殿下とはきっと素敵な夫婦になれるって思っていたわ」
「ジョージアナ様……」
「でも、夫婦って色々な形があると思わなくて？　なにも夫婦の間にあるのは恋愛感情だけではないわ。それに、私が過干渉をやめたことで殿下もきっと安堵なさっているでしょう」

「それはどうでしょう……」
ぽつりと、何事かを呟いたクレア様。
私はよく聞こえなかったので聞き返したが、彼女は柔らかく微笑むと「いいえ、なんでもありませんわ！」と言ってはぐらかすのだった。

◆　◆　◆

デージーの香が充満する執務室は心地よく、どこか切ない。
（買うつもりなんてなかったんだけどな）
気が付いた時には、店にある全てのデージーを買い占めていた。女店員の輝く目と溌剌とした声、そして側近エドワードの「こいつ本気か」という視線を思い出し、はあっとため息をもらした。
陶器の花瓶にデージーを活けながら、ジョージアナならどのようにこの花を可愛がったのだろうかと、どうしようもないことを考えた。
エドワードも、ある程度の事情を知る学友たちも、触らぬ神に祟りなしとばかりになにも言ってこないが、ジョージアナは明らかに僕との関係を断とうとしている。

いつもなら、帰宅する時も。昼休みも。休日も。

「一緒にお茶をしましょう」「お時間があれば、一緒に勉強しませんか？」と声をかけてくる。

だが最近はそういった類の誘いは一切なく、それどころかジョージアナが他の令息と親しくしているところを目撃する、ということもあった。

側近がすぐさま「あの令息は伯爵令嬢（ミランダ）の婚約者です。ちなみに、伯爵令嬢もジョージアナ公女のお隣にいらっしゃいます」と誤解を解いてくれたが、胸が押し潰されそうな痛みは消えてくれなかった。

（僕にこんな苦痛を味わう義務なんてないだろう）

そう思うが、僕には最近見せてくれないあの優美な笑顔をどこぞの令息には見せているのか、と考えるだけで、吐き気を催す痛みが心臓を駆け巡りとても仕事が手につかない日もあった。

（そういえば）

僕は一度だって、私的な場で他の男と二人きりで話しているジョージアナを見たことがないと、ふと思い出す。

「ジョージアナの配慮だったのかな」

誰もいない部屋で小さくそう呟きながら、メイドが淹れてくれた紅茶を口に含んだ。

ジョージアナが美味しいからと言って僕にくれた茶葉を使ったと聞いたのだが、冷えているせいか、貰った当初は甘くて美味だと思った紅茶が、今はとても苦く渋みのある紅茶に思えた。

◇　◇　◇

「殿下！　こちらにいらしたのですね、ああ、会いたくてたまりませんでしたわ！」

友達と仲良く話しながら食堂に向かっていくジョージアナを、教室の窓からぼんやり眺めていると、とある令嬢が僕の机の前にある椅子に堂々と座った。

いつもならば無邪気だな、元気だな、と思うその行動。

だが、僕はその令嬢のことを「はしたない」と思った。そして、そんな感想を抱いた自分に驚きを隠せなかった。

（今、誰と比べて……）

愕然（がくぜん）として片手で口を覆っていると、その令嬢は不貞腐れたように唇を尖らせて僕を詰（なじ）る。

「んもう殿下ー。最近、全然相手をしてくださらないですね。私、寂しいですわ」
「色々忙しくてね」
「公女様のことでしょう？　喧嘩なさったって専らの噂ですよう」
「喧嘩か」
僕は頭の後ろをかきながら、それならどれほど良かっただろう、と思った。
喧嘩なら、謝れば済む話だ。喧嘩なら、喧嘩なら……
（でも、そうじゃない）
僕は再び窓からジョージアナの姿を見る。先程よりも遠くなったその姿は他の生徒たちがいるのにもかかわらず、一瞬で見つけることができた。
「宣言、いつ終わるのだろう」
最初はその宣言を聞いた時、正直有難いと思った。
ジョージアナの愛情は深く温かい。まるで真綿で包み込まれるような安心感もあり、心地が良いのは確かである。だが、女性といるところを見つけると怒ってくる。婚約者なのだから当然と言われたらそれまでだが、あくまで僕たちは国にとって都合の良い駒でしかない。なのに、何故それほど苦しそうな表情で僕を怒るのかが分からなかった。
したがって、それがなくなるのは嬉しかった。解放されたとさえ思った。

（でも）
何故だろうか。今は呆れたように僕を咎めるジョージアナが、とてつもなく恋しく感じられた。

◆◆◆

「今日もいいのですか？　一か月近く、殿下の宮へと行っておりませんが」
侍女の質問に私は頷いた。
「ええ、今日も家でゆっくりするわ」
私は酸味と苦味がある檸檬茶を飲みながら、今頃殿下は女性遊びでもなさっているのか、それとも公務に精を出しているのか、どちらなのだろうかと思いを馳せる。
いつもならば、皇宮で行われる妃教育の際には必ず殿下が住まう宮へと足を運んでいた。妃教育がなくても、ご多忙を極めていらっしゃる殿下に気に入った茶葉とお菓子を持って会いに行く日も少なくはなかった。畢竟するに、殿下に会えればそれだけで満足だったのである。
しかし、私は宣言以降殿下に自ら会いに行くことは一切やめた。

妃教育も修了したので、宮中に用もない。

お母様はこのことについて嘆いておられたが、別に妃にならないと申し上げたわけでもないので放っておいてほしいものである。苦痛に悶えるのも、屈辱的な思いを味わうのも、お母様ではなく私なのだ。

婚約者に尽くすか尽くさないか、その決定権ぐらい当事者である私にあっていいだろう。

「お母様のお気持ちも分かるけれど」

――私だって、愛されたいの。

そんなことを考えながら長椅子に座り本を読んでいると、私の侍女たちが慌ただしく部屋に入ってきた。

普段は冷静沈着としており、並大抵のことでは感情を露わにしない子たちなのだが、珍しいこともあるものである。

そう思ったのも束の間、侍女の言葉に私は驚愕した。

「で、殿下が！　皇太子殿下がいらっしゃいました！　お嬢様にお会いしたいと！」

◇　◇　◇

「……お待たせいたしました、殿下」

侍女総勢五人がかりで準備してもらったからか、それほど時間はかからなかった。とはいえ、客人は婚約者である皇太子殿下である。そんなお方を長くお待たせしてしまった、という罪悪感が私の脳内を支配していた。

そんな私の気持ちを悟ってか、殿下は苦笑を浮かべた。

「いや、なんの予告もなく来たのは僕の落ち度だから。すまない。それよりも、急ごしらえだったのにその衣装とても似合っているね」

「お褒めに与り光栄です」

私が着ている衣装は自分で選んで購入したもので、己の瞳の色と同じ薄緑色を基調とした衣装である。だから似合っているように見えるのだろう。

殿下は熱いなにかを瞳の中に棲まわせながら、やや掠れた色気ある甘い声で囁くように言う。

「今度は、僕が贈った衣装を着てほしいな」

「遠慮いたしますわ。他の令嬢と被ってしまったら恥ずかしいですもの」

考える時間も作らずきっぱり断ると、彼の美麗なご尊顔から血の気が引いていく。

「そんなこと有り得ない」
「あら、そうでしたか」
今となってはもはやどうでもいいことである。殿下が他の令嬢に花を渡そうが、綺麗な衣装を渡そうが、私はただの婚約者にすぎないのだから。
（それに）
私は殿下からの贈りものをもう受け取らないと決めた。受け取ったら、再び筆舌に尽くし難い苦痛を味わうのは目に見えている。貰えば、素直に喜びきっと期待してしまう。灼熱の炎で心臓を炙られるような、辛酸をなめる日々などもう送りたくはない――
私は拳をぐっと握って、打ちひしがれたような表情をする殿下を見ながら徐に問うた。
「なんの予告もなく屋敷を訪れることが無作法であるとご存知でしょう。ご来訪の理由をお伺いしてもよろしいでしょうか」

◆◆◆

久しぶりに見たジョージアナの綺羅を飾った姿は、得も言われぬほど美しく犯し難い威厳を醸し出していた。

特に、彼女の瞳の色に合わせて作られたような翡翠色の衣装は似合っている。瞳と同じ色であることがより一層神秘さを深めているように感じるのは気のせいだろうか。
だからこそ衣装を贈ろうと言った時に、にべもなく断られて絶望した。
（本当だよ、ジョージアナ）
僕は一度だって、ジョージアナ以外の女性に贈りものをしたことがない。
「なんの予告もなく屋敷を訪れることが無作法であるとご存知でしょう。ご来訪の理由をお伺いしてもよろしいでしょうか」
ぐっと奥歯を噛みしめていると、冷然とした態度でジョージアナが聞いてくる。そこにあからさまな非難や怒りの色はないものの、どこか咎めるような口調ではあった。
（前までだったらきっと、苦笑いしながらも許してくれていただろうな）
そんなことを思いながら、重い口を開いた。
「……公爵に聞いた。今年の夏は公爵領で過ごすと。今まで一緒に離宮で過ごしていたじゃないか。どうしてか、わけを聞いてもいいかい？」
学園には約二か月ほどの夏休みがある。その期間、毎年のように僕とジョージアナは皇族が管理する離宮で過ごしていたのだが、今年は彼女は公爵家が管理する別邸で過ごすと言う。

（もう、僕と過ごすのがいやになったの）

そんなことを考えていると、彼女はゆっくり顔を上げて僕を見て微笑んだ。

少し切なそうな艶やかな微笑であった。

◇　◇　◇

――遡ること数日前。

僕はいつものように、平静を装って仕事に没頭していた。

最近、ジョージアナがそっけない。宣言通りとはいえど、いくらなんでもそっけなさすぎる。

そのせいで仕事が手につかず今は、父親である陛下に「皇太子であるという自覚を持て」と窘められたことで、無理やりジョージアナを脳内から追い出し、公務を行っている状態なのだ。

（ジョージアナ……）

彼女のことを考えながら廊下を歩いていると、偶然クロローム公爵（ジョージアナの父）に呼び止められた。

こんな時に呼び止められるなんて……と、戦々恐々としていたらやはり、案の定悪い

知らせだった。

「殿下。今年の夏、娘は我が領地の別邸で過ごすようです。おそれ多くも娘が毎夏離宮に殿下の同伴者として伺っていたので、お伝えに参りました」

「……」

なんとなく、分かっていた。

皇族や貴族は蒸し暑い夏を快適に過ごすため、領地に別邸を置いて夏はそこで過ごす。勿論、公爵領にも立派な別邸があるが、ジョージアナは毎年僕と離宮で夏を過ごしていた。

他ならぬ彼女が毎年希望していたのである。

（でも……）

今年は誘いがなかった。

待った。いつものように待っていた。待って待って待って……

それでも、こなかった。

その上で公爵のこの言葉。

（それが意味するものって……）

ぞっとするなにかが背筋を駆け巡り、まるで首に短剣を突きつけられているような錯

覚に陥った。足元がぐらぐら揺れ、視界が歪み、呼吸が上手くできない。

――「殿下のことを愛していました、ですがそれをやめます」

ふと、あの時のジョージアナの覚悟や決意が込められた言葉が、脳内に嘲笑うように響き、僕は絶望の底に落ちたような心地がした。

「私は」

絶望を味わいながら茫然自失していると、公爵が済度し難い男を見る目で僕を見ながら言った。

「立場上、娘の願いばかりを聞くわけには参りません。帝国の今後を思うなら、親の贔屓目を差し引いても、娘ほど皇后に相応しい人はいないでしょう。ですから、娘は殿下と結婚させます。このことに変わりはありません」

しかし、と続ける。

「娘が嫁ぐのは国であって、殿下ご自身ではありません。意味はお分かりでしょう」

「……！」

それは即ち、僕の地位と結婚させるのであって僕自身と結婚させるわけではない、ということである。

（僕が皇太子という身分でなければ）

ジョージアナは僕の妻にはならない、ということと同義であった。

（ジョージアナが、僕とは違う男と……？）

想像しただけで心臓を無遠慮に握られたような痛みが走り、視界が暗転しそうだ。

そんなみっともない僕を公爵はなんの感慨も籠らない目で一瞥すると、一礼して去っていった。

……その日の夜、僕は子どもの頃の夢を見た。

無邪気で幼いジョージアナと、同じく幼い自分。登場人物はこの二人だけで、果てしない草原を二人でひたすら走り回る、という特に意味のない夢だった。

だが朝になって起きてみると、自分の頬には涙が流れていて、その涙に一驚を喫した。

そして、あの夢がなにを表していたのかに気づき、口から乾いた笑い声が勝手にもれた。

「最悪だ……」

あの夢は、僕とジョージアナの平穏な日々を、目覚めた時の涙はそれが永遠に失われたことを示していたのだ。

「失ってから気づくなんて」

ジョージアナの笑顔、関心、静寂を漂わせる森のような慈愛に満ちた瞳。それと他な

らぬ、ジョージアナの美しく高潔な心そのもの。
それと引き換えに得たものは、虚しさと終わりの見えない暗闇のような後悔のみ。
天使を見失い、神の手で奈落の底に落とされた気分だった。
（愚かなことだ）
ジョージアナが僕を見放す、なんて考えたことがなかった。彼女の愛情はどう見ても薄っぺらいものではなかったからだ。
その傲慢さが緩く、だが確かに己の首を絞めていたのである。

◇　◇　◇

ジョージアナに己が捨てられたのだと漸く気づいてから、数日経った頃。
僕は側近エドワードの名を呼び、手紙はきていないかと問うた。彼は皇太子宛ての手紙が何通か届いていたと言ったが、僕の目を見てそういう手紙ではないと理解したらしい。
「きておりません」
「……そうか」

僕は書類を揃えながら、ぎゅっと目を瞑った。
あの日から、地獄の炎で焼かれるような苦痛を味わい続けている。
喪失が自分の責任だからこそ、その灼熱の炎は勢いを増し消える兆しがない。
だが、ジョージアナの辛苦や悲嘆（ひたん）に比べればこれぐらいどうということはないのだろう。
（それでも厚かましく、会いたいと希（こいねが）うから）
僕はそんな自分を嘲笑う。ここまで己が魯鈍（ろどん）な人間であるとは思いもしなかったのである。
「公女になにかお話でも？」
「そうだよ」
「それならば、お手紙はやめたほうがよろしいかと」
「何故？」
エドワードは困惑する僕をどこか憐れむような、軽蔑するような目で見て言った。
「殿下。私が仮に公女のお側にいる心ある人間であれば、まず、殿下のお手紙などお渡ししません。主の心を乱し、傷つけた張本人からのお手紙を、どうしてやっと前を向き始めた方に渡せると言うのです？　あまりにも愚かではありませんか」

立ち読みサンプルはここまで